

か紹介します。

大講堂の構造は遠近法を活用しており、玉座に対する視線を考えた緻密な造りに驚くとともに、玉座におられる陛下を仰ぎ見た時「父はどういう気持ちで、どういう姿勢で聞いていたのだろうか」という思いにかられました。また大講堂の7200枚にのぼる檜材の寄木の床板は当時のまま一枚一枚番号をつけて同じ場所に敷いたとのこと。その仕事ぶりにいたく感激し「父は80年前どの板を踏んだのだろうか」と思わず手で触れてしまいました。

と感じました……とのことでした。
見学終了後の検討会で、二・二六事件が話題になった際、2人の方からお話がありました。

一人は、中平一州 次男孝夫氏、事件当日の日記を紹介してくれました。

「2月26日 水 又々雪トナル、軍制試験終了。本払曉大不祥事アリ、午後四時半校長閣下ヨリ訓示アリ、本事件真相未タ俄カニ判スヘシトハイワサレトモ、国軍ノ多大ナル事件ニシテ如何ナル理由アロウトモ、間違ヘルハ明フカナリ」
今一人は、名本忠義 次女の矢野益子さんが「反乱軍が今にもこの市ヶ谷台の士官学校に攻め込んで来るとの判断の下、当時学生であった父たちはたたき起こされ、士官学校の各所に防衛のため銃剣を持って立たされ続けたが、昼間の訓練や教育の疲れで眠くて仕方がなかつた」と直接お父様から聞いた話をエピソードとして紹介してくれました。

今回の見学に際し、私たちに懇切丁寧に説明してくださった須賀芳夫さん以下係員の方々に、深く感謝申し上げます。

(文責 衣笠)

四十八期

(卯月会)

担当者
衣笠 陽雄

市ヶ谷台・記念館を見学して

逢坂幸一

2月26日、卯月会会員17名は三笠宮殿下と我等の父・叔父たち陸士48期生が切磋琢磨し青春を過ごした市ヶ谷台・記念館を見学しました。ねらいは父・叔父たちの慰霊と顕彰活動に役立てることでした。このため参加にあたって、当時の資料を持参するよう呼びかけておりました。当初、記念館の大講堂で市ヶ谷台の歴史をDVDで見せていただきました。その中で士官候補生が体操しているシーンに皆「若いなあ、もしや父が」という思いで食い入るよう見つけておりました。また二・二六事件も紹介されましたが、当時48期生は士官学校在学中でした。

以下、参加者がどのような気持ちで施設を見、どう感じたかという思いをいくつ

さらに展示品のなかで栗林中将が家族へ宛てた書簡では世に喧伝された勇将というイメージの他に家族に対する細やかな愛情表現があり、「厳しくて近寄り難かった今は亡きわが父も心の中では深い愛情を持っていたのであろう」と胸が熱くなりました。便殿の間では天然の冷房施設やドアの造りだけでなく、遠近法を活用した昭和9年の大演習を撮影した写真に感心してしまいました。「写っているはずもないが、ひよっとしたら写っているのでは」と目を凝らして探しました。

さらに士官候補生たちが朝な夕なに遥拝した雄健神社では「若き父たちは何を思っただけでいたのだろうか」と思いを馳せると同時に、この神社が朽ち果てる寸前で修理の予定もないとの話に、「これを聞いたら、父は寂しく思っただろうな」